

雑談が問題解決型の議論に与える影響とその効果に関する研究

Group Learning based Casual Conversation on effective

奥原 俊^{*1}
Okuhara Shun

伊藤 孝行^{*2}
Ito Takayuki

^{*1} 藤田保健衛生大学 ^{*2} 名古屋工業大学情報科学フロンティア研究院
Fujita Health University #1 Nagoya Institute of Technology Frontier Research Institute for Information Science #2

In this research, conversations that fall outside themes imposed by a debate topic is considered chatting, and the impact of chatting on debate or reasoning is investigated. Among students, in many problem solving-related discussions there is a good deal of chatting included in the conversation. However, despite there being this prevalence of chatting in problem solving discussions, there has been no research that has investigated its influence. Therefore, in this research, we investigate and analyze the influence of chatting on conclusions reached by consensus using conversation analysis on problem solving discussions.

1. はじめに

学生同士による問題解決型のグループ学習では、頻繁に議論の中に雑談が行われる。雑談はコミュニケーションを取る上で、相手との信頼関係[尾崎 1996] [藤本 2007]や思考の把握に利用されていることが報告されている。しかし、問題解決型の議論では雑談のような課題に関係ない内容は教員が観察に基づいて評価を実施すると、評価対象とならないばかりか、減点対象となることもある。そのため、問題解決型の議論で行われた雑談は、評価はおろか、その影響や効果について調査、分析が進められているとは言い難い現状がある。

そこで、本研究は問題解決型の議論に対して雑談がどのような影響を及ぼしているかを検証するために会話、及び合意形成に対する満足度などから調査を行う。

2. グループ学習における雑談

本研究では雑談を筒井[筒井 2012]が定義した“特定の達成すべき課題がない状況において、あるいわ課題があってもそれを行っていない時間において、相手とともに時間を過ごす活動として行う会話”とする。

また、筒井らは 5 名に対してアンケートを実施し、3 名以上が雑談として評価した発話を雑談としている。本研究では筒井らの指標を拡張し、5 名中に何名がその発話を雑談と認識したかの度合いを調査する。

具体例で示すと、『人を泣かせるにはどうすればいいか』というテーマで議論を行ったとする。

例1.

- A「玉ねぎを切らせるといいんじゃないかな」
- B「ああ、肉ジャガでも作ってもらおうね。って、どんなシチュエーションなんだよ」

例2.

- C「腹減ったわ。飯が食べたい」
- D「そう言えば、昼食が近いね。何を食べようか」

例1の議論に参加している学習者 A と議論に参加している学習者 B の会話は、人を泣かせる手段について言及しており、評価者の 5 名中 4 名が課題に沿った議論になると認識したとする。その状況は、雑談と認識した評価者は 1 名であるため、雑談として 20[%]と認識された発話とする。

また、例2の議論に参加している学習者 C と議論に参加している学習者 D は『人を泣かせるにはどうすればいいか』という話題に言外の意味を含めても関連性がないため、5 名中 4 名が雑談であると認識したとする。上記の状況では、その発話を雑談として 80[%]と認識されているとする。

本研究ではグループ学習で取得した発話データを課題に沿った議論、及びそうではない雑談として収集し、雑談がどのような問題解決に影響を与えているかを検証する。

3. 実験

3.1 実験概要

本実験ではグループ学習で与えられた課題を議論しながら解決を目指し、最終的に合意案を 1 つの答える形式の問題解決型の議論を実施する。議論はアイデアを出すステージと合意形成のステージの 2 つがある。1 つ目のアイデアを出すステージでは、アイデアが思い付いたら、忘れないように紙に付箋で貼り付ける作業を主としている。2 つ目の合意形成のステージでは、与えられた課題に対して 1 つの回答になるようにグループ内の学習者同士で議論して決定する。

以上の 2 つのステージを実施することで、本実験では雑談が議論に参加する学習者にどのような影響を及ぼすかについて、調査を行う。

3.2 実験設定

本研究は、2016 年 10 月から 11 月に男子学生(12 名)、女子学生(24 名)で行なった。本実験は議論に参加する学習者を 4 名で 1 つのグループとし、A から H までの 8 つのグループで実施した。また、本実験は、グループに参加する各学習者が合意形成結果に対して納得しているかを示す満足度と、各グループが合意形成して出した結論に対する相互評価(以下、グループに対する評価)を 1 点(低い)から 5 点(高い)で点数付けを行い評価する。

3.3 実験結果

本節は、実施した問題解決型の議論の合意形成結果に対する満足度、及び各グループに対する評価、発話数について述べる。はじめに表1に各グループの学習者が合意した結果に対する満足度の平均値を示す。

表1 各グループの合意形成結果に対する満足度の平均値

グループ	A	B	C	D	E	F	G	H
満足度	3.75	4.00	4.25	4.00	4.25	3.75	3.25	4.25

満足度は高いグループ順に E, H, D, F, G, A, B, C であった。

次に表2は学習者が各グループに出した合意結果の平均値である。

表2 各グループに対する評価の平均値

グループ	A	B	C	D	E	F	G	H
評価	2.49	2.82	2.67	3.03	3.54	3.77	3.69	4.00

評価が高いグループ順に H, F, G, E, D, B, C, A であった。

最後に実験の結果として発話数について述べる。合意形成のステージで発話数は全グループ総合計で 1079 回であった。図1に各グループの発話数を示す。

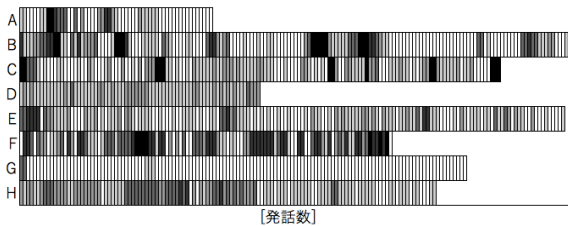


図1 各グループの発話数と雑談の割合

図1は縦軸が各グループを示し、横軸が各グループ内で行われた発話数を表している。本研究では発話を示している長方形の四角が黒に近いほど雑談に認識されていることを表している。また、発言を示している長方形の四角が白色に近いほど雑談と認識されていないことを表している。発話が多かったグループ順に B, E, C, G, H, F, D, A であった。発話の中で雑談が占める割合が多いグループ順に F, H, C, D, B, E, A, G であった。

4. 考察

本研究では、問題解決型のグループ学習で行われた雑談の影響や効果について調査した。調査は、雑談の影響を把握するために問題解決型の議論の合意形成結果に対する満足度、及び各グループに対する評価、発話数から行なった。

まず、雑談と発話の関係の特徴を理解するために発話数が多い上位3つと雑談の割合が多い3つのグループに関して述べる。雑談が多かった上位3つ B, C, E のグループでは、発話数でも全て上位3グループ以内であった。B, C, E の各グループの合意形成結果に対する満足度の平均値と各グループに対する評価の平均値について述べる。各グループの合意形成結果に対する満足度の平均値は B が 4.00, C が 4.25, E が 4.25

と上位3つに入るほど高い結果であった。各グループに対する評価の平均値は B が 2.82, C が 2.67, E が 3.54 と上位3つに入るほど高い結果であった。以上を踏まえると本研究で実施した発話が多いグループは、雑談も多いが満足度が高い結果であった。

雑談の割合が多かった上位3つの F, D, A のグループでは、発話数が全て下位3グループ以内であった。F, D, A の各グループの合意形成結果に対する満足度の平均値と各グループに対する評価の平均値について述べる。各グループの合意形成結果に対する満足度の平均値は F が 3.75, D が 4.00 であった。グループに対する評価の平均値は F が 3.77, D が 3.03, A が 2.49 であった。以上を踏まえると雑談の割合が高いグループは、発話数が少ない傾向があることがわかった。

また、雑談が少ない G グループでは、グループに対する評価の平均値は 3.69 と3番目に高いものの、グループの合意形成結果に対する満足度が 3.25 と最も低い結果であった。

つまり、本実験では、雑談が少ないグループは評価が高いものの、満足度が低い結果であった。

以上の結果より、本研究では、雑談を多く取っているグループほど満足度が高い傾向があることがわかった。従って、問題解決型の議論では雑談が潤滑油のように会話を促進し、学習者同士の結論を協調して、決めることで満足度が高かったと思われる。

5. おわりに

本研究では、雑談が問題解決型の議論に与える影響について調査した。その結果として、雑談を多く行なっているグループは発話も多い傾向があることがわかった。また、本研究では、雑談の割合が少ないグループは、合意された結果に対して満足度が低い結果が得られた。

以上のことから問題解決型の議論では、雑談はグループの合意した結果に対する満足度に影響を与えている可能性が高いことがわかった。このことは雑談によるコミュニケーションが他者の意見に対して同意しやすい下地を形成したために、起こったことだと思われる。しかし、本研究で実施した実験ではサンプル数が少ないため、雑談とグループの合意形成結果に対する満足度に関係性が一概にあると定量的に述べることは難しい。そのため、次の調査では被験者を増やし、雑談などのコミュニケーションを把握するために被験者の発話関係を可視化し、問題解決型の議論ではどのような影響が雑談から及ぼされているかを調査する予定である。

謝辞

本研究は公益財団法人堀科学芸術振興財団に支援を頂きました。ここに感謝を申し上げます。

参考文献

- [尾崎 1996] 尾崎明人: 会話教育のシラバス再考 - 会話の展開と問題処理の技術を中心として -, 名古屋大学日本語・日本文化論集 第4号 名古屋大学留学生センター, pp.119-136, 1996.
- [藤本 2007] 藤本 学, 大坊 郁夫: 小集団コミュニケーションにおける話者の叙述パターン, 社会心理学研究 23(1), 23-32, 2007.
- [筒井 2012] 筒井佐代: 雑談の構造分析, くろしお出版, 2012.